

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 20 年度派遣報告書

—ラオス・ラオス国立大学、ラオ語、派遣期間(H20. 5. 11—H20. 9. 29)—

平成 18 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 3 回生
川江 心一

自身の研究テーマについて

本研究の目的は、ラオス北部において、パラゴムノキ栽培導入が、焼畑民族の生業にどのような変化をもたらしているかを明らかにすることである。生業変化を分析することにより、世帯ごとの所得構成の偏りや、村落内の経済格差拡大を検証する。

ラオスは国土の約 80%が山岳地帯に属し、北部では陸稲作中心の伝統的焼畑農業が営まれてきた。各農家は、陸稲作だけでなく、家畜飼育、非木材林産物の収集など多様な生業を複合的に営んできた。

ラオス北部では、中国経済発展の影響により商品作物栽培が拡大しているが、中でもパラゴムノキ栽培は特に広がっている。その理由として、中国のゴム需要拡大とそれに伴う価格高騰が挙げられる。北部では、パラゴムノキ栽培が 1990 年代半ばに最初に導入され、2003 年以降は急速に拡大するようになった。

ラオス北部のような山岳地帯でパラゴムノキを植林する際は、多くの初期労働投入と多額の初期投資が必要である。富裕層はパラゴムノキ栽培を積極的に導入しているが、貧困層は導入が困難である。その結果、経済格差が拡大していると考えられる。しかし、パラゴムノキが導入されて間もないこと、パラゴムノキは植林から収穫までに 7~8 年を要することから、生業変化に関する経済学的研究はまだ十分になされていない。従って、本研究では、ゴムの収穫が既に開始されている H 村において農家経済調査を実施し、生業変化に伴う経済学的問題を明らかにする。



パラゴムノキの幹を傷つけて、ゴムの樹液集める



村の広場でのゴム販売の様子

研修言語の概要

ラオス語は、ラオス人民民主共和国の公用語であり、独自のラオ文字を持つ。また、ラオス語は声調言語であり、無気音と有気音の区別がある。つまり、同じ音でも単語の違いによって音の発音、抑揚が異なる。ただし、ラオス語の発音には地方差があり、ビエンチャン方言、北部方言、南部方言などによって発音が異なる。

語学研修の内容について

ラオス国立大学文学部において、週4日、一日2時間ラオス語の個人講義を受講した。教科書が初級、中級、上級に分かれており、語学研修期間中に中級まで終わらせることができた。

個人授業は男女の教員1名ずつが日替りで担当した。個人授業では、自らの習熟度によって授業の進む速さが決まるので、毎回の予習・復習が欠かせなかった。授業前日の一日をかけて次の課の予習を行い、授業終了後にその日の復習を行うという研修日程であった。予習では、毎回の新出単語、文法事項を辞書で調べ、発音の練習を行った。復習では、単語帳を作って単語を覚え、さらに既習の課の会話練習を行った。

初級の教科書では、最初の2週間を使い、ラオ文字の読み書きと発音の練習を行った。ラオ文字習得後、簡単な会話を題材として、一般的な単語と文法事項を習得した。最初に教員と会話の練習を行った後、数問の問いに答えることにより、会話と読み書き両方の練習を行った。

中級の教科書では、より複雑な会話を題材として実用会話の練習を行った。

このような研修日程をこなすことにより、基礎的なラオス語の力は十分に身に付いた。ただし、調査では、更なる専門用語の習得や北部方言の理解などが必要であったため、調査中も継続してラオス語の学習を行った。



ラオス国立大学文学部



授業風景

研修期間中に印象に残った体験や経験

私は音楽の才能に乏しく、音感もないので、声調言語を学ぶのは大変だった。特に、最初の発音の練習では、同じ文字の発音でつまずき、何度も直された。先生は、同じ音の無気音と有気音の違いを何度も発音して教えてくれるのだが、自分には違いがわからなかったため、最初は同じ失敗の繰り返しだった。

ブレイクスルーとなったのは、ラオス在住の日本人研究者の方のアドバイスだった。口の前に紙を一枚おいて、無気音では息を吐かずに、その紙が動かないよう発音する、有気音では吐く息で紙が動くように発音する、というアドバイスだった。この練習法を始めてからは、それぞれの文字を正しく発音す

ることができるようになり、先生に「もう一度」と言われることも少なくなった。ただ、その後も各単語の声調には苦しめられた。

目標の達成度や反省点について

全く未知の言語であったラオス語を文字から学び、自分で辞書を引いて自学自習ができるようになった。その結果、ラオス語の文献や統計資料も、辞書を使いながら読解が可能となった。また、会話においても、調査の際の基本的なインタビューは調査補助者の助けをかりず自分一人で行うことができた。

ただし、自分一人で全ての調査を行うには、まだまだ語学力が不十分であった。特に、インタビュー調査の際の会話では、自分の声調が不正確なことから相手に質問事項が伝わらないことや、逆に相手のラオス語が聞き取れずに返答が理解できないことがしばしば起こった。語学研修中も教室内の会話だけでなく、街中でより多くの日常会話に接すれば、この点はもう少し改善できたかもしれない。また、研修中に必要な専門用語を全て押さえておけば、調査中の負担を減らすことができただろう。